

## 幼子残し海渡る妊婦 ホテル住まい



帰島。高速船を下りた佐々木亜希さんに、子どもたちが駆け寄ってきた

OKI ISLAND。島根県沖に浮かぶ小さな島の出来事が、5月1日の米紙ワシントン・ポスト1面に掲載された。

1万7000人が暮らす隠岐の島町。ここでは、4月16日から常勤の産婦人科医がいなくなり、妊婦は海を渡って本土で出産を迎えている。記事は、世界第2位の経済力を持つ日本の少子化や産婦人科医不足を紹介し、島の苦悩を、日本の「New Pains」(新たな痛み)と指摘した。

取材したアンソニー・ファイオラ・北東アジア総局長(37)(東京)は、「日本が直面する社会問題として取り上げた。反響はEメールで50～60通。多くは、米国の同盟国がその国力を維持できるのか、というものだった。日本の少子化は、国際問題になりつつある」と指摘した。



5月27日。松江行き的高速船「レインボー」が、穏やかな海に白い航跡をひいて隠岐の島町・西郷港に入ってきた。「プー」。のどかな汽笛の音が、大きなお腹(なか)をした佐々木亜希さん(28)には、切なく聞こえた。「緊張してきました」

70キロ離れた松江市の七類(しちるい)港まで1時間余り。今日と明日の土、日曜は、夫や3人の子どもと一緒にホテルで過ごす。その後、出産予定日の6月17日まで、心細い一人暮らしが始まる。

「頑張ってこいよ」。高速船にタラップがかけられると、義母のあい子さん(58)は、四国の金比羅さんで授かってきた安産のお守りを手渡した。

「お産で島を離れるなんて、思ってもみなかった」。高速船が小さくなるまで見送ったあいさんは、赤く目をはらしていた。

佐々木家は3世代7人家族。隠岐で生まれ育ったあいさんは、大工の淳さん(65)と結婚して3人の子どもを島で産み、育てた。同じように島で育った亜希さんも、18歳で、大工を継いだ保さん(35)と結ばれ、渚ちゃん(9)、悠ちゃん(7)、杏実(あみ)ちゃん(1)の娘3人を島で産んだ。そして、4人目も

当たり前前の島の暮らしが、4月に一変した。

島で唯一分娩(ぶんべん)を扱っていた公立隠岐病院への県立中央病院(出雲市)からの常勤産婦人科医の派遣が打ち切られたのだ。外来診療は月曜日だけ。11月に派遣再開のめどがたったが、その間、70人の妊婦は予定日が近づくと、本土の病院の近くに滞在し、出産に備えなくてはならなくなった。

ストレスから誘発分娩を決断



祖母あい子さんに抱かれる瑠一郎ちゃん(いずれも6月12日、島根県隠岐の島町・西郷港で)

亜希さんの一人暮らしが始まった。「島の妊婦割引」で1泊3675円のホテル。机に、子どもたちの写真。持ち込んだ炊飯器で自炊したが、子どもたちが心配で、そのストレスが赤ちゃんに影響しないか、また心配になって、体重は2キロ落ちた。

宅配便で届いたあい子さん手作りの、タケノコやイサキの煮付けを泣きながら食べた。「お母さん、頑張って」。子どもたちからの手紙が添えてあった。

島では、あい子さんが孫の世話を追われていた。渚ちゃんと、悠ちゃんは亜希さんの枕を毎晩、交代で使った。「かっか、かっか」と亜希さんと呼ぶ杏実ちゃんに添い寝したが、真夜中に泣き出した。「こんな、こんまい子につらい目をさせて」と、腹が立った。

亜希さんが誘発分娩の決断をしたのは、一人になって9日目の6月6日。様子を見に来た保さんの顔を見て、こらえきれなくなった。自然に産みたかったが「限界でした」。

7日朝から、陣痛促進剤の投与が始まった。やがて陣痛が始まり、午後5時57分、男の子が産まれた。大きな声で泣いている。「元気に生まれてきてくれてありがとう」。そして「早く産んでごめんね」。涙が止まらなかった。保さんも泣いていた。

12日夕。小さな命を乗せた高速船が松江を後にした。緑の島影が迫り、あの汽笛の音が、港に着いたことを知らせてくれた。「お母さーん」。渚ちゃんと悠ちゃんが船から下りた亜希さんに抱きつき、初めて見る、弟に目を丸くした。

佐々木家でお祝いの夕食が始まった。保さんは「瑤一郎」と名前を発表。「ぶら下がっちゃった(男の子だった)」と、淳さんは、ビールと焼酎で上機嫌だった。久しぶりに家族の笑顔が亜希さんを包んだ。

「どんな赤ちゃんが生まれてくるのかと、幸せなはずの時間が、不安でいっぱいでした」。島を離れていたのは、16日間。亜希さんには、1か月にも2か月にも感じられた。

(2006年07月23日 読売新聞)

私は上記のような新聞記事を目にして、現代の日本でこのようなことがあってもいいものかと思った。何百年もの昔から出産は女性にとって、人生の中でもっとも心に残る出来事の一つであったと思う。昔は、産婆さんと呼ばれる女性が産気づいた産婦の家に向かい、出産の手助けをしていた。産婦の多くは自宅という一番住み慣れた、安心できる場所での産していたのである。

しかし、現代では産婆制度はなくなり、産科医師や助産師が出産の介助を行うようになって以来、自宅での産することは難しくなりつつある。自宅での産産は難しくても、やはり産産の場所は住み慣れた土地であるのが産婦にとっても、その家族にとっても一番望ましいことではないかと思う。しかし現在、産婦人科の医師不足をはじめとした周産期医療のマンパワーの不足により上記の記事のようなことが起こってしまった。

では、すべての女性が安心して、産産できるために私たち医療従事者は何ができるのだろうか。

やはり安心して産産するためには、産婦自身が安心して産産できる場所が必要であると考える。住み慣れた場所で、自分が望む場所での産産できるように地域での産科医療におけるマンパワーを充実させるべきであると思う。

また、上記のように家族と離れ、産婦一人で見知らぬ土地へ行き、産産することに対して抱く不安は計り知れない。その結果、ストレスから誘発分娩を自ら希望するまでに至った。住み慣れた土地で、大好きな家族と一緒に産産を迎えられたなら産婦が持てる力を最大限に発揮して、より安全な産産ができたであろう。住み慣れた土地で、大好きな家族と一緒に産産を迎えるためにも、地域でのマンパワーはより必要になってくる。

産科医師の不足が問題となっている現代において、今すぐ地域でのマンパワーを充実させることは困難であるかもしれない。しかし、産科医師と助産師、看護師が協力し周産期医療に携わることで地域での産科医療に貢献することはできないだろうか。地域での産科医療に貢献するためにもこれからは、助産師が助産師の独自性を発揮する時代がやってくるのではないかと思う。

私はこの記事を読んで、産科医療の充実していない地域でどれほど不安を抱えて産産の

ときを迎えているのか知ることができた。出産とは激しい痛みを伴うもの、それだけでほとんどの産婦は不安を抱くと思う。それだけでなく、家族と離れ、慣れない土地での出産ということでどれだけ不安に思ったことだろうか。将来、私は助産師としてこのような地域に出向き、地域での産科医療に貢献できる人間になりたいと思う。限られたマンパワーの中でも、精一杯助産師としての独自性を発揮し、医師との連携をとりたいと思う。そして、産婦、その家族が望む場所での出産できるように助産師として援助していきたい。また、産婦が安心して出産の日を迎えられ、安全な出産ができるように見守っていける助産師になりたいと、この記事を読んで改めて思った。